

学 校 経 営 要 綱

I 学校経営の基本構想

1 公教育としての基盤に立つ学校

- (1) 日本国憲法、教育基本法、学校教育法をはじめ、教育課程の基準である学習指導要領に則った教育を行う。
- (2) 福岡県の学校教育振興プランや筑後市の教育施策、筑後市教育振興基本計画、学校管理規則等に則った教育を行う。

2 コミュニティ・スクールとしての地域とともにある学校

- (1) 子供一人一人が、松原校区の一員として安心して生活でき、楽しく登校できる地域と学校づくりに努める。
- (2) 家庭とのコミュニケーションを図り、保護者が安心して子供を送り出せる信頼される地域や学校づくりに努める。
- (3) 地域から愛され、期待に応える学校を目指し、地域の「ひと・もの・こと」を生かした教育活動の推進に努める。
- (4) 筑後市や松原校区に愛着をもつ子供を育成するために、「協力・仲間」「伝統・愛着」「感謝」の心を重視した教育の展開に努める。

II 児童の実態から

1 学力面から

- (1) 日常の授業から
 - 全体的に学習態度は落ち着いてきており、教師や児童の発言に対し静かに聞こうとする態度も少しずつ身についてきた。しかし、最後まで聞く、内容や思いを理解しようとしながら聴く児童はまだ少ない。また、どの学年にも様々な要因で「教室に入れない」「授業に参加できない」「集中して学習できない」児童がみられる。また、学習習慣の崩れや学ぶ意欲の減退により、学力が低下している児童もみられる。児童の学習意欲を高め、児童が主体的に学ぶ教育課程や学習指導の工夫が必要である。
 - 主体的・協働的に学ぶために、スマイルタイム（話し合い活動）を授業に位置づけたことで、自分の考えを書いたり、発言したりする児童が育ってきた。
 - 児童アンケートから「国語や算数の学習はよく分かる」と答えた子供が 91.2%と高い。しかし、教師アンケートでは、「基礎・基本が未定着な児童が多く、探究的な学びには至っていない」64.7%と最も多く、内容の定着（できる）ところまで至っていないと考えられる。
 - 多くの子供が図書室を活用し、貸出冊数（量）も増えてきた。しかし、読書の傾向に偏り（質）が見られる。また、家での読書習慣がほとんど無い児童や、借りない児童も一定数おり、全体的に語彙力の未定着がみられる。読書活動の充実を図る必要がある。
 - 授業で発言したり、理由を添えて発表したりする児童が増えてきた。昨年の校内研修において、学級活動（1）「目的意識・相手意識を持った表現活動（話し合い活動の活性化）」に取り組んできた、その成果が他教科にも派生したと考えられる。
- (2) 全国学力・学習状況調査（令和 7 年度 6 年生）
 - 全国比国語科－3.8、算数科±0である。5 年生県学力調査→6 年生全国学力テストまでの推移を見ると、国語科は－3.1 算数科も－8.3 と下降傾向にある。特に「読むこと」の数値が－10.4 と低下が見られた。しかし「書くこと」においては＋18.5 とこれまでの取り組みの成果が見られた。
 - 国語科では、「話すこと・聞くこと」－9.3、「思考・判断・表現力」が－4.4 と課題が見られた。問題の意図の把握に課題があり、目的や意図を明確にした対話活動の充実が必要である。また、与えられた複数条件全てを満たした回答ができておらず、複数の情報からそれぞれ条件に合った内容を落とさず選択して書くことに課題がある。

資料の統合と比較思考し結論を導き出すような授業の工夫が必要である。

- 算数科では、全体でみると全国との差はないが、「図形」の正答率は6割以下、「思考・判断・表現力」は5割以下と正答率が低く課題が見られた。特に「図形」では、式や言葉を用いての記述に無回答が多く、解答の理由を言葉や数を用いて説明することができない様子が多くみられた。式と言葉を一致させた説明を書く習慣を身に着ける必要がある。
- 質問紙を見ると「国語の授業がよく分かる（全国比－12.6）」「算数の授業がよく分かる（全国比－11.2）」と課題である。また、「自分で学び方を考え、工夫する（全国比－11.6）」「課題解決に向け、自分で考え、自分から取り組む（全国比－13.2）」と、基礎・基本の習得もだが、自ら学ぶ意欲にも課題が見られる。「考える」授業を仕組みとともに、挑戦することで自ら（周り）の成長を実感できる学校づくりが必要である。

（3）県学力調査（R7年度5年生）から

- 標準化得点をみると 県比国語科－5.4、算数科－1.7と、県より低い傾向にある。四部位層で見るとAB層が県比国語科－13.3、算数科＋3.4と国語科に課題があり、国語科のC層が45.2と高く、A層が11.9と低くなっている。
- 学力の中央値は87.95点であり、全国平均を下回る。また、得点分布は159.3点から5・6点と広く、個人差が大きいといえる。
- 正答率を見ると国語科はほとんどの項目で県を下回っており、課題が見られる。算数科は、全てにわたって、県正答率と大きな差はないが、「変化と関係」4割以下「記述」5割以下と課題が見られる。

（4）標準学力調査（R6年度1～6年生）から※R7年度に変更

- 全国平均を上回る学年教科は、25%である。
- 同一集団による経年比較をみると、昨年より56%の教科で向上している。向上した学年教科→2年生（国語、算数）、4年生（国語、社会、理科）、5年生（社会）、6年生（社会、算数、理科）
- 学年内で結果を比較すると、学級間差が大きい学年がある。

2 生活面から

（1）日常生活から

- 素直で明るく、外で元気に遊ぶ児童が多い。全国学力調査の質問紙から「学校に行くのが楽しい（全国比＋7.5）」「自分に良いところがある（全国比＋4.1）」「人が困っているとき進んで助ける（全国比＋4.1）」等の姿がみられる。半面「将来の夢や目標を持っている（全国比－10.0）」と低い傾向にある。自尊感情や人間関係は良好であるが、「良いところを認めてくれる（全国比－5.6）」と承認欲求が満たされていないと考えられる。様々な活動の中で児童一人一人の「頑張り」や「成果」を、意識して「褒める」ことが必要である。
- 縦割り班を生かした学校行事（運動会、松原フェスティバル、6年生を送る会等）や日常的な活動（掃除等）の中で、良好な人間関係を築くことができるようになっている。特に、高学年になると、委員会活動や学校行事等の集団活動で責任ある役割を任せ、規範意識や自覚が高まり、リーダー性を発揮できるようになる児童が多い。
- 発達や家庭環境の難しさ、生活リズムの乱れを要因とする「教室で落ち着いて学習ができない」「行き渋り・不登校」等の様子が見られる児童が増えている。家庭と共通理解を図り、子供家庭サポートセンターや支援センター、SC、SSWと連携した対応が必要である。

（2）児童アンケートから

- 「『まっばら』の挨拶ができる」と答えた児童が88.9%と高く、児童会等の活動を通して啓発活動や振り返る場を設定することで、地域の方に進んで挨拶したり、横断歩道を渡る際に運転手に向かって礼をしたりする児童も見られる。
- 「縦割り清掃」を通して「三C清掃（三心清掃）」ができていると答えた子供が85.0%

と高く、縦割り清掃の継続した取り組みで集中して掃除に取り組む児童が増えている。しかし、学級清掃時には 72.5%と低くなり、清掃の心構えが徹底されていない様子が見られる。学年・学級での自己指導能力を高める必要がある。

- 「くつやスリッパをそろえる」について、できていると答えた児童が 85・0%と高く、職員の声掛けや委員会活動等の取組が効果を上げている。
- 「友達に『ありがとう』『ごめんなさい』を自分から言える」と答えた児童が 92.5%と高いが、職員のアンケートでは 82.5%と児童との意識の差が見られる。積極的な学年学級経営や繰り返しの指導で、良好な人間関係が形成されつつあるが、自分の感情をコントロールできず、相手言葉を聞き入れたり思いを受け止めたりできずにトラブルになることも依然として多く、継続して取り組む必要がある。

(3) 家庭・地域の環境について

- 保護者は、学校行事や授業参観等に進んで参加し、協力的である。
- 一部朝食を食べていない、身だしなみが整っていない、早寝・早起きができない、登校時間が守れない児童が見られる。保護者への関わり方が難しく、家庭環境の厳しさがあある子供については、関係機関（SSW、SC、家児相）等と連携し対応している。

3 体力面から

(1) 日常生活から

- 始業前や業間休み、昼休み等に進んで運動場で遊ぶ子供は多い。学級経営の一環として、学級で遊ぶ時間を設けたり、スポコン広場を取り入れて運動に取り組んだりする学級も見られる。

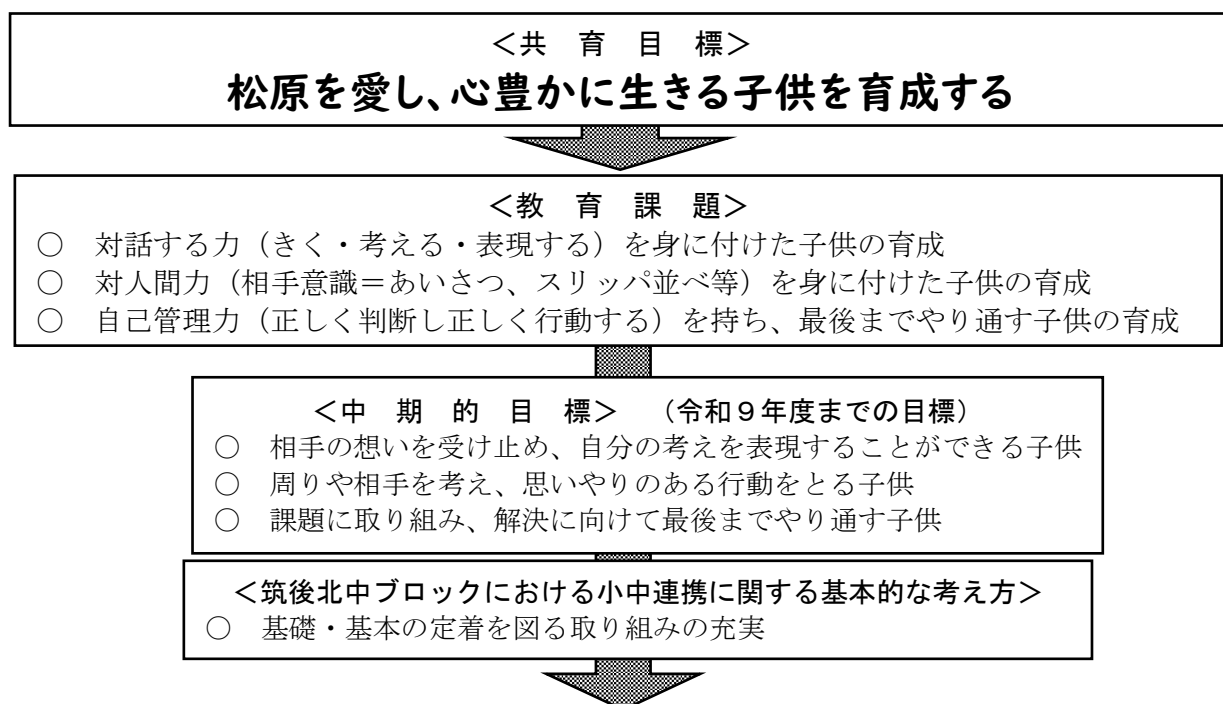
(2) 学校行事や体育科の学習から

- 意欲的に参加し、運動を楽しんでいる子供が多い。
- 体操服等の準備ができていなかったり、苦手意識があつたりすると、見学する児童が複数名いる。学習準備を整えられるように、学級・学年便りや連絡帳の確認や声掛けをしたり、保護者と連携したりすることで、学習への参加を促している。

(3) 全国体力・運動能力、運動習慣等調査（5年）から

- 体力・運動能力調査実技調査では、合計得点が男子55 女子が51で、共にC判定であり、全国平均程度といえる。総合評価（5階層）をみても、A層13%B層34%とAB層で全体の49%を占めており良好な状態である。
- 実技別にみると男女共に「シャトルラン（男子+6.4、女子+4.2）」で、全国より高く、持久力が優れている。しかし「立ち幅跳び（男子-7.8、女子-15.3）」で跳躍力・瞬発力に課題がみられた。

Ⅲ 共育目標から本年度の重点目標へ



令和8年度 <重点目標>

○ 「きく力」を身に付けた子供の育成

<経営の重点>

- 課題を自分事としてとらえ、自他の成長を実感できる授業づくり

<経営課題>

- 主体的な学びを目指した教育課程の徹底と学習指導力の向上
- 子供同士がつなげ自己存在感を高める（安心）ことを目指した学年・学級経営力の向上
- 生徒指導の4つの機能を生かした自己指導力（自己調勢力）の育成

Ⅳ 重点目標について

○ 「きく力」を身に付けた子供の育成

【重点目標の意味】

「きく力」とは、「聞く（受容）」→「聴く（共感）」→「訊く（探究）」の3ステップからなり相手を尊重しより良いものを創ろうとするための力のことである。「だれが」「だれに」「何を」「何のために」といった相手意識や目的意識をもって「きく」ことである。

『「きく力」を身に付けた子供』とは、授業や教育活動の問題解決の過程において、子供達が主体的、協働的に対話することで解決策を模索する姿のことである。

そのためには、相手を理解しようとして「きく」こと、つないで考え話すことで自身の理解を深めること、丁寧に分かりやすく相手に返す（応える）ことが大切となる。目標達成の過程や自分自身の姿を振り返ることで、目標に向けて対話する楽しさや学習内容を理解する喜びを感じ、成就感や達成感を味わったり、自他の高まりを感じたりすることができる。

【具体的目標】

特別活動及び国語科、算数科を中心とする教科・領域の中で

- 単元の流れや前時とのつながりを理解し、自分のめあてや見通しを持つことができる。
- 学習のめあてに沿って筋道立てた説明や根拠や理由等を明確にした自分の考えを相手に話したり、相手の考えを聴いたりすることができる。（対話活動）
- 相手の考えにつないで考えたり、分かりやすく応えたりする対話活動を通して、自分の考えを付加修正強化することができる。
- 自分や友達の良さや学びの成長の姿を、学習の振り返りに書く（話す）ことができる。

Ⅴ 重点目標達成に向けた具体的方策（経営の重点）

1 校内研修…学級活動（1）を核とした集団作りで、「きく力」を育成する取組

（1）相手意識・目的意識を持った対話活動を位置づける。

「きく」→「考える」→「応える」→「きく」のサイクルを繰り返すことで、「きく」の3ステップを段階的に習得し、児童が安心して対話できる学級集団を育成していく。

（2）様々な課題を自分事としてとらえ、自分たちで考え、方策を意思決定する、自主的、実践的な活動を積み重ねることで、児童の自治的能力や自己指導能力を高めより良い生活や人間関係を築き、学校生活の充実と向上を図る。

- ①みんなが協力して楽しく豊かな学級・学校生活にするために、学級や学校生活の中から集団や個人の課題を見出し、解決するための方法や内容を話し合い、集団としての「合意形成」を図り、協力して実践する。（学級活動１）
 - ②現在の生活上の課題を取り上げ、一人一人の自己の課題の解決方法について「意思決定」し実践する。（学級活動２）
 - （３）各教科においても対話活動のサイクルを位置づけ、学級活動で身に着けた「きく力」を活かしてく。
- ２ 児童一人ひとりがめあてを持ち、他と協働して課題に関わり、自他の成長を実感する取組**
- （１）各学期の学校行事（運動会、松原フェスティバル、６年生を送る会）に関連した道徳・特別活動・総合的な学習の時間の指導を工夫し、１学期「協力・仲間」、２学期「伝統・愛着」、３学期「感謝」の価値について実現すること
 - （２）学期ごとの個人の目標を立て、自己評価を行い、目標達成に向けた自分自身の取組を振り返ること（取組過程や結果の評価、賞賛の場を設ける等、目標達成へ向けた意欲の向上や達成感を味わわせることを重視）
 - （３）学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動（活動の記録としてココメモやキャリアパスポートを活用し、「子供の想いを聴き、過程や結果を認め、次への活動へ励ます」視点で学校・地域・家庭が価値付けを行うこと）
 - （４）企画する力と責任をもってやり通す力を育むために、子供の自主的活動を設定（児童会、委員会活動等）すること
- ３ 組織の企画、運営力の向上を図り、同僚性を発揮させる組織運営体制**
- （１）教頭のリーダーシップ、主幹教諭の連絡調整による二部会各主任等との連携
 - ・重点目標達成に向け、D-CAPサイクルを踏まえた二部会（「学びづくり」「関わりづくり部」）の運営と活動内容の充実
 - ・校務分掌等における人材育成（メンターによる指導・助言）
 - （２）業務の達成感や充実感に繋げる学校評価及び学級経営案（自己評価）の活用
 - （３）前後期ごとの子供の育ちの検証（共通アンケート）と方策の改善
 - （４）児童の特性又は家庭環境に応じた関係機関（市教育委員会、スマイル、県児童相談所、市家庭児童相談室、SC、SSW等）との連携と継続した対応

VI 教育課程編成の基本的方針と改善点

- １ 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善**

今日の学習で、何を、何のために行うのか見通しをもち、周りの人と共に考え、話し合い、考えを深化・修正してまとめ、振り返る過程が明確な授業の実現を目指す。
- ２ 基礎・基本の習得**
 - （１）小中連携において基礎・基本の定着を図る取り組みを行う。児童が「できた」を実感することができるように「計算力」に重点を置いて、学期に１回のチェックテストを実施し、個々の伸びを評価する。
 - （２）くすのきタイムや学び道場を充実させる。
- ３ 探究的な学習過程を重視した総合的な学習の時間**

総合的な学習の時間では、問題解決的な活動（①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現）がスパイラルに繰り返され、発展的に学びを高めていく探究的な学習過程が展開されるように単元計画や一単位時間の授業を計画していく。
- ４ 特別の教科 道徳**
 - ①言語活動を充実、②問題解決的な学習、体験的な学習等の工夫、③「これまでの自分」「これからの自分」について考えを深めることの３つの視点から授業改善に取り組む。
- ５ コミュニティ・スクールを生かした「社会に開かれた教育課程」の推進**

- (1) 松原コミュニティ協議会、校区公民館、PTA諸活動等との連携による「松原を愛し、心豊かに生きる子供」を目指した教育活動と評価活動の実施
- (2) めざす子供像をから「何を学ぶか（教育内容）」「何ができるようになるか（資質・能力）」を明確にし、年間の学校・松原校区の行事を軸に、教科横断的な視点による各教科等の指導（カリキュラムマネジメント）実践
- (3) 学習活動において地域のよいところや課題について「知る」活動や学んだことを地域に生かす活動を重視した「ひと・もの・こと」の積極的な活用
- (4) 実践した学習活動の結果について、学校（教師・子供）、地域、保護者からの評価をもとにした計画の改善と教材の開発